第６回 2030年の「心豊かな」ライフスタイル

ネイチャー・テクノロジー研究会

コンテスト入賞作品

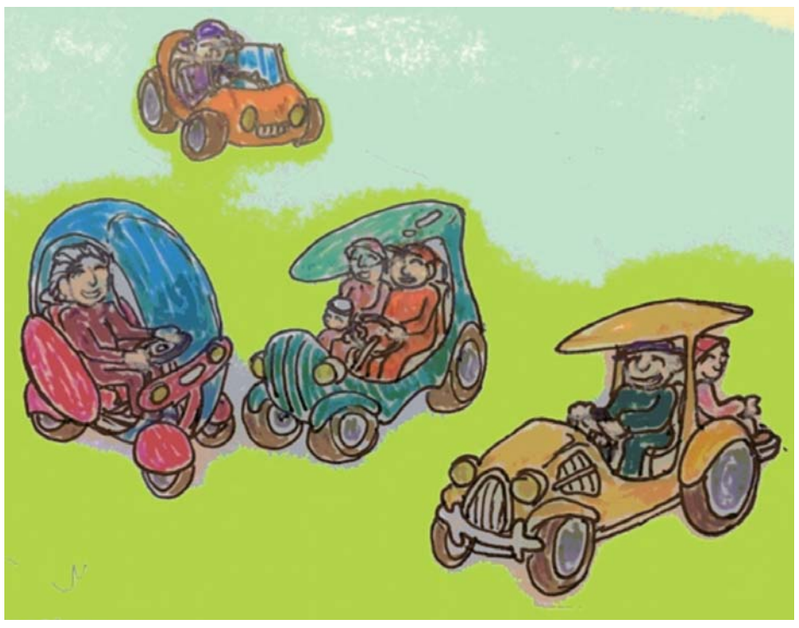
モノづくり日本会議（事務局＝日刊工業新聞社）のネイチャー・テクノロジー研究会は「第6回2030年の『心豊かな』ライフスタイルコンテスト」の入賞作品を決定した。コンテストは環境・エネルギー制約が頂点に達する12年後の2030年を想定し、制約下にあってもワクワクドキドキする心豊かな未来の生活シーンを描くもの。今回のテーマは「SDGsで創る持続可能な未来」。文章・イラスト部門は、49件の応募の中から最優秀賞1件、優秀賞2件、審査員特別賞1件を選定し、川柳部門は、309件の中から最優秀賞1件、優秀賞4件を選定した。

モノづくり日本会議
超モノづくりへの挑戦

最優秀賞

シニアライフを支えるモビリティ

大日方 祐彦さん
（東京都三鷹市、54歳）



田舎の生活を支えるには、今も昔も車が便利だ。かつて、お年寄りの事故多発が恣意的に報道され、免許証の返納優遇策によって多くのお年寄りが車を降りた。オンデマンドタクシーや介護施策の整備が約束されていたが、手元の車に代わるほどの便利さは無かった。しかも、車を手放したことで、出掛ける楽しみが減って鬱になったり、医院に赴くのは重症化してからになったりと悲しみを増やすことも多くなってしまった。そんな折、元気なシニア層を中心に提案された「高齢者向け小型特殊自動者免許制度」が追い風となり、私たちお年寄りの田舎生活が一変した。事実上、農耕用と工事車両程度しかなかった小型特殊自動車に「高齢者向け移動作業」の用途が追加されて車両の種類も増えた。公道制限速度は時速15キロと従来通りでも、ご近所付き合いや診療所通いには十分な速さで、近場に出掛けるのですら旅気分を味わえる。そして、反射神経の鈍った世代でも十分に安全運転できることと、他人を傷つける恐れが大幅に低減した軽量・安全な車体によって乗り手と周囲への安心感も増した。田舎道での小さな車体は、交通の邪魔にもならず、今日もトコトコとお出掛け日和だね。

優秀賞

花がつくる安心とはちみつの暮らし

菊池 成仁さん
（岐阜県輪之内町、25歳）他2人

この街では、毎年市役所から各家庭に花と種、植木鉢がプレゼントされます。ツツジやハナノキなどの土地に根差した花から、奥さんの好きな花を選ぶ人が多いようです。近所の人の花にはもうつぼみが付き始めて、この地域の養蜂場から飛んできたニホンミツバチが、開花するのを今か今かと待っています。

街には高齢者も多いのですが、家の前に置かれた花がすくすくと育っている様子から、元気に暮らしていることをうかがい知ることができます。「あ！もうレンゲソウの花が咲いたんだね！」街の子どもたちはみんな花博士で、水やりをしているおばあちゃんと楽しそうに話しています。もう少し暖かくなったら、ミツバチは各家庭の花から蜜を集めて、この土地の味のはちみつを作ってくれます。はちみつは、各家庭に配られたり、カフェやパン屋さんでも食べることができます。

この街のたくさんの花たちは、住民の心を和ませ、街の外からもたくさんの人たちを呼び込んでいます。

川柳部門

【最優秀賞】
資源より　思源が次世代　エネルギー　松田　清司（三重県伊勢市、66歳）

【優秀賞】応募受付順
足るを知る　そこにエコ知る　知恵を知る　鮎川　郁夫（東京都渋谷区、72歳）
伝統を　継いで求める　新技術　杉本　湘路（神奈川県川崎市、72歳）
遅いほど　見える地域と　人のかお　鈴木　章弘（東京都品川区、61歳）
モノじゃなく　心の贅に　シフト替え　吉川　智子（大阪府枚方市、50歳）

優秀賞

農業体験で彩りと笑顔があふれる暮らし

寺本 風音さん
（岐阜県大垣市、23歳）他３人

近年異常気象が多く、野菜価格の高騰が当たり前になっています。このような状況の下、農業体験レストランは多くの人でにぎわっています。

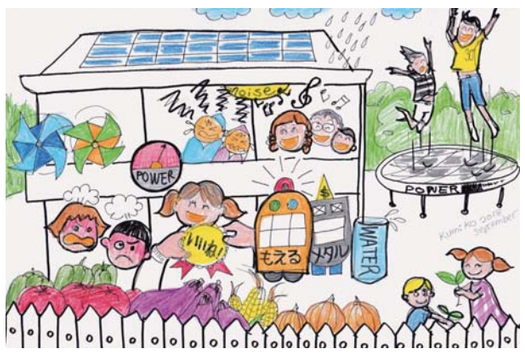
そこでは、少しのお代と労働力でとれたて食材を使ったおいしい料理が食べられます。併設された農場ではお客さんたちが協力して野菜の手入れを行っているのでお店も大助かりです。農作業の休憩中には皆でお茶を飲みながら、お父さんたちは野菜の育て方、お母さんたちは野菜のおいしい食べ方について談笑しています。また、子どもたちの食育も行われ、どれだけ苦手なピーマンでも自分の手でちぎったピーマンは甘くておいしいと喜んで食べています。

このお店は家庭菜園を始める第一歩です。この体験を通じて子どもが興味を持ち、畑を借りて栽培を始める人が増えてきました。食卓には採れたての真っ赤なトマトや青々としたキュウリなどといった色とりどりの野菜があふれ、家族みんなの笑顔が咲いています。

審査員特別賞

子どもと大人が助け合う暮らし

相馬 久美子さん
（東京都杉並区、56歳）



子どもたちにとって保育園は生活の場。子どもとはいえ消費者であり生産者。彼ら自身が生活インフラ「電気」を維持する保育園がある。

まず「地球はエネルギー危機だが、運動・位置・熱・光・音から電気を作れるし、リサイクルもいい方法だ」と教わった。国内の至る所に、メーター、センサー、エネルギー変換道具が設置された。「外遊びで電気を作ろう」「リサイクルロボットに持って行こう」という助け合いの一方で「私が走った電気よ」という小競り合いもおき、分け合いを学ぶ場面となる。

また年下を助けるなど、国の住民として尊ぶべき事や創造的発想は、帰りの会でたたえられエネルギーポイントが付与される。通常電力で保育園が維持されたとしても、行動の結果が見える仕組みは楽しい。実際、大人は子どもたちの自助と創造性に助けられている。子どもたちは不自由だと不満をいう側にはおらず、当たり前だと思っている。楽しみながら生きる術と自分の役割を学び成長した子どもたちは、2030年を生きる力を持っている。

講評

審査委員長 石田 秀輝さん

ネイチャー・テクノロジー研究会コーディネーター
（東北大学名誉教授）

時代を先取りした暮らし方のかたち

車を電気自動車（EV）に置き換える―残念ながら電池のエネルギー密度はガソリンなどに比べて比較にならないほど低く、長距離を移動することはハードルが高い。おまけに使用する銅は約4倍にも増える。

これにかかわらず、何かと何かを置き換えるという発想は、残念ながら地球環境視点からは評価できるものは少ない。

最優秀賞の「シニアライフを支えるモビリティ」は、まさにこの点を見事にクリアーした。いろいろな形の車が、のんびりとここそこを走り、そこには、笑顔が満載されている光景が目に浮かぶ、あたらしい環境産業の提案にもなろう。

アインシュタインは「ミツバチがいなくなったら4年以内に人間もいなくなる」と言ったが、今まさに世界中で急激にミツバチが減少している、そんな折「この土地の味がする蜂蜜をつくってもらう」という「花がつくる安心とはちみつの暮らし」には笑みとともにほっとさせられた。農業体験は最近盛んであるが、「農業体験で彩りと笑顔があふれる暮らし」は家庭菜園を始めるための予備校的な視点での提案で、現実的で面白い。

今年初めて公募した川柳も多彩で良い勉強になった。中でも最優秀賞の「資源より　思源が次世代　エネルギー」は、まさに次世代に求められる重要な価値観をさらりと短い句の中に表現していただいた。

今年も多くの作品に出会え、具体的な多くの視点を見せていただいたことに、心から感謝したい。

審査委員 涌井 雅之さん
（東京都市大学特別教授）

「弱者も楽しい日常」可能に

持続的未来を確実にするための国際的課題SDGsに対応するためにはライフスタイルそのものを大きく変化させる必要がある。専門的見地での言葉で表現すれば「適応」戦略であり、これまでの技術一辺倒で地球の限界を乗り切れる段階（緩和）は過ぎ、人々の日常のライフスタイルを変化させねば対応できないレベルに達している。

6年前、このコンテストが始まった頃の応募の内容、夢が語られた内容が多い。ライフスタイルという概念が当たり前に浸透し、シンプルな暮らしで日常を豊かに彩り、未来に夢を託せるライフスタイルが語られるようになったからであろう。「弱者も楽しい日常を」可能にする今年の最優秀賞がその典型と言える。

また川柳にもそれが現れ、スタイルとは形ではなく、考え方であるということを実に楽しく表現している。啓発の時代は終わった。持続的未来を、子どもたちと楽しく夢にあふれた日々の暮らしの中で実践する時代となった。

審査員 木積 凜穂さん
（書道家）

制約は我慢ではなく楽しみ

川柳が加わり、今年も心温まる作品にほのぼのとさせていただいた。幼い頃から「もったいないことしたらあかんよ」と育った私は、与えられた資源を大切に使い切りたいという思いから、「modern　書art」の幅広い表現のスタイルが出来上がっていった。

皆が幸せに生きることのできる元気な地球を取り戻すために、「私たちは今何をしなければならないのか？」「個々に地球を思いやり行動できれば…」「それを楽しめたら…」地球環境に配慮し歳を重ねてもおしゃれを楽しみ、子どもたちの遊びの中からエネルギーを生み出し、高齢者の孤立防止を気遣い、子どもからお年寄りまでが日常の中で関わりをもつ地域づくりなど、他を思う愛にあふれた優しい心が伝わってくる作品に、温かな気持ちと安堵をいただいた。

表現者として、制約は我慢ではなく、楽しみが発見でき、心豊かになるということをあらためて心に刻み、作品にも生かしたい。

審査委員 中井 徳太郎さん
（環境省総合環境政策統括官）

資源配分シフトを加速

第5次環境基本計画では、パリ協定とSDGsという世界の大潮流を受け止め、目指すべき脱炭素でSDGs・生命文明社会を目指すとしている。

「地域循環共生圏」とは、私たちのくらしが森里川海といった自然資本に支えられ、自然のエコシステムの一部として成り立っているという原点まで立ち返り、テクノロジーの有効活用によりエコシステムがポテンシャルを発揮し、地域を活性化させるという視点で経済・社会を再構築するものである。循環・共生という生命・自然界の摂理に人類活動を調和させることで、地下資源依存型の大量生産・大量消費・大量廃棄の経済から脱却し、結果的に脱炭素が達成される。

今回の応募作品を通じて、私たちが描く未来はこの「地域循環共生圏」に向かっていると実感させられた。そのための資源配分シフトを加速しなければならない。そしてこのシフトこそが新たな成長の原動力となるであろう。